川俣町×近畿大学　プロジェクト

調査概要

1.1　はじめに

本報告書は、福島県が実施している「大学生の力を活用した集落復興支援事業」における福島県伊達郡川俣町福田地区での調査過程から研究成果までを記したものである。構成としては、第1章は訪問までの集まりで出た復興案についてとその生まれた理由について述べ、第2章では第1回の訪問で取得した情報を記している。事前準備していた提案や質問事項を基にした情報などが含まれる。第3章は、川俣町訪問を経て得た、住民の声に対する解決や新たな案を提示した後に第4章で、第1回訪問時に伺えなかった方々からの情報収集や、第2回の訪問の際、第3章での案に対する現地の方々の声をまとめる。そして、第5章でこれまでの章のあらすじを示した後、第6章として最終案を提示する流れである。

1.2　目的

本プロジェクトの目的はエコツーリズム、国際ツーリズム開拓のための現地資源調査であり、福島県伊達郡川俣町福田地区に眠る地域創生、活性化のためのヒントを学生の視点から模索し、案を創造することである。

1.3　研究方針とチーム構成

我々は、近畿大学総合社会学部と国際学部の学生で構成されており、目的である国際ツーリズム、エコツーリズムといった観点から、過疎化や高齢化の課題を解消に近づける地域創生案を提案することである。

1.4背景

チーム構成を活かした提案を考えながら、人口減少や交通アクセスの改善などの社会問題に向き合った。また、東日本大震災の影響、例えば風評被害により偏見が植えつけられるといったこと。福島県川俣町もその被害を受ける地域の1つでした。しかし、それを払拭すれば再興できるといった単純な構造でなかったことが、実地調査や文献調査をしていくにつれて理解できたように思われる。

私たちにできることは何か。そして、何よりも地元住民の方々が動いてもらうにはどうすればいいのか。どちらかの一方通行ではいけないように感じた。双方が頑張りたい、動きやすいと思ってもらえるような提案づくりを心がけた。

1.5理由

「川俣町までのバスって少なくて、定期代も高い」

サイクルツーリズムを提案内容に掲げた理由として、「アクセスの悪さ」を挙げられ、これをサイクルツーリズムによって改善できないかを検討した。

また、福島県内でも複数のサイクリングロードがあり、担当した福田地区では道路が比較的整っており、再整備の余地が少なく済むなどの観点から、サイクルツーリズムの取り組みやすさを裏付けられると考えている。

そして、「人口減少」に歯止めをかけるべく、サイクリング人口を筆頭に、関係人口を取り込んでいき福島県に、川俣町に、訪れてもらえるような魅力を作りだす。風評被害を取っ払うことを目的かつ大きな理由として考えている。

第１章　　訪問前までの案

9月の第1回目川俣町訪問に向けて、私たちは会議を数回行い、川俣町復興支援事業の案は全部で７つに絞った。

その7つとは、①住みやすい街づくり　②観光ツアー　③プラスチックゼロの町　④商店街お化け屋敷計画　⑤移動時の娯楽化　⑥外国人を受け入れる町　⑦PV（プロモーションビデオ）作りである。

①の「住みやすい街づくり」あがった理由は、川俣町の福田地区は超高齢化社会であって平均年齢が６５歳を上回っているからである。そこで高齢化の過疎地帯の町で問題となっている孤独死の問題が福田地区でも起きる可能性があり対策を考えた。その対策内容は地区内の住人が起床の際に家の前に旗を立て、安否の報告をするというものだ。これによって、住人の日々の安否が確認できるうえ、国内で話題となり川俣地区が注目されることが狙いだ。

②の「観光ツアー」が挙がった理由は、イベント時以外での川俣町への訪問者が少なく、川俣町を絡んだツアーもなく関係人口が少ないからである。観光ツアーを企画して対策しようとした。そのツアーの内容は、川俣町のベンチャー的植物「アンスリウム」で絹を染める体験、川俣町の山から湧き出る延命水の源へウォーキング、道の駅のはた織体験、川俣町の特産品の軍鶏のえさやり、そば作りの体験などから構成されている。

③の「プラスチックゼロの町」が挙がった理由は、ゴミの排出を削減するなどのエコ的な活動はメディアに取り上げられると予想し、川俣町が有名になるきっかけになると考えたからである。その内容は、徳島県の上勝町で実施されているような、スーパーやコンビニと協力してプラスチック袋の提供を廃止し、住民は極力マイバックやマイボックスなどを使用してプラスチックの排出量を徹底的にゼロに近づけるというものだ。

④の「商店街お化け屋敷計画」があがった理由は、川俣町での新規イベントを企画して関係人口を増加させることを目的とする。その内容は、川俣町の現在利用されていないシャ

ッター街を、その独特な雰囲気のままお化け屋敷の会場に利用するというシンプルなものだ。これは福島市の東新町商店街で行われた事例がある。

⑤の「移動時の娯楽化」が挙がった理由は、近隣の都市の福島市から川俣町への公共交通手段がバスの運行のみであり、それも１時間に１本程度とやや少ないことに着目した。その内容は、福島駅からレンタサイクルとしてサイクリング移動を推奨することや、１時間に１本のバスやバス停を若者が好感を持てるような外観に改装するなどである。

⑥の「外国人を受け入れる町」があがった理由は、国内だけでなく外国の旅行客や留学生を寛大に受け入れ、外国人受け入れの町として押そうと考えたからである。その内容は、民宿の提供、国際交流会の場所の提供などである。

⑦の「PV作り」があがった理由は、PVによって国内外に川俣町の魅力を宣伝し興味を持ってもらおうと考えたからである。その内容は、２１世紀の宣伝広告の媒体であるYouTubeやFacebookなどに複数の言語を駆使したPVを投稿し閲覧してもらうことである。

そして、この７つの案の実現性を確かめる為、第１回目の現地訪問を行った。

第2章　第1回目（9月10日～13日）の訪問記録

川俣町の理解を深め、夏に出し合ったアイデアがどのくらい実行可能か、あるいは実現にあたっての素材探しを目的とし、第1回目の訪問を行った。

佐藤町長と面会時

町長さんからは川俣の全体像をお伺いし、高齢化と人口減少が1番の課題と捉えられていた。その解決策として、まずは関係人口から増やしていくことに力を入れていきたいと伺った。町の人の交通手段は一時間に1本ほどのバスか、車であり、高齢者が多いこともあり80～90歳まで町の人は運転をするようで、自転車を主な交通手段にする人は少ない。小学校は6つあり、ALTの先生による英会話クラスや、英語合宿を行うなどしてグローバル化にも前向きである。現在では海外からの働き手も多く、インド、韓国、ベトナム、中国の主にアジア圏からの外国人はおおよそ100人ほど住んでいるようで、町からも補助を行っている。

アンスリウム管理施設を訪問時

おじまふるさと交流館の近くでアンスリウムを栽培している高橋さんにお話を伺った。アンスリウムの栽培は、近畿大学が川俣町と連携し、「”オール近大”川俣町復興支援プロジェクト」の一環として試験栽培しているものである。化学繊維、ポリエステル媒地で育てたアンスリウムの花は、震災復興の象徴であると同時に2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックの選手に贈られることを目指している。

2018年の10月からは2020年東京オリンピックに向け、新しいビニールハウスを建てており、そこではスマートフォンやタブレットで一括管理が可能であり、全自動で温度調節もできる。この建物にかけられた費用は7000万円ほどする。30代～70代の11人がアンスリウムの栽培に取り組んでおり、1つのビニールハウスで約2000本育てている。アンスリウムの花は昨年280円くらいで取引されたが、ほかの植物と比べて大きめのアンスリウムの葉は、1枚80円で花の約1/3の値段のため、まだまだ使い道を見つける必要性がある。この花は傷つきやすい特徴もあるが、茎を切ればピンク色の水が出てくるので、その色水を使い染め物をすることも可能。オリンピック・パラリンピックの後は、今のところ特に目標はなく、その後の注目度によって使用用途が変わってくるそうだ。

蚕工場を訪問時

高齢化により後継者が少なくなり、今では輸入のシルクが多く約95パーセントが輸入のもので、5パーセントが国産の割合に当たり、川俣で生産されるものは日本1の繭である。蚕は約5000匹がかわれており、主な餌として桑の葉を与えている。ここでは、繭をはかせるところまでであるが、場所によれば卵を作るところや、繭とさなぎを分けて綿を作る工場もある。昔は、家で飼っていたため、川俣地区の家は大きいものが多い。

福田地区区長の蓮沼さん宅を訪問時

町の平均年齢は62歳で畑を所有している人が多く、趣味で野菜を作っている。町の女性は料理が達者な人が多く、葬式の時は料理をみんなで作るそうだ。商店街は町にはなく、一つの案である商店街でのお化け屋敷の実現性はないことが明らかとなった。エコに関しては、マイバックを進んで使用し、また区長が実施していることとして、出かけるときなどは極力用事をまとめるようにしているらしく、環境問題への関心は高い。町の問題としては高齢化に伴い、詐欺の被害に注意することや、震災後放置されている畑が多いため使われていない畑を有効活動できる方法、例えば、１つの畑を耕し町民が共同で野菜を育て、その野菜を使った料理をみんなで囲みながら会話ができる場所として使うなど、があればと考えている。

「森の案内人」蓮沼さん宅を訪問時

蓮沼さんからは、自然にまつわる事、町で行われているイベント、生きていく上での豆知識などを教えていただき、夏に考えた案についても意見を頂戴した。肝試しの案については、商店街はないが町の人主催で小学生も参加する、お墓を回る肝試しは開催したことがある。どこかそういったイベントができる場所を伺ったところ、10年入居契約をすると1家無料で借りられる場所があるという。延命水のことを伺うと、長寿泉が小島山にあることが判明したが、規模はあまり大きくはないという。町のエコの取り組みとして、クリーン作戦を8月に1度実施しており、内容としては女の人はゴミ拾いをし、男の人は草刈りをするそうだ。

今回、第１回目の川俣町への訪問では、訪れる前に模索していた企画を現地で実行可能か注目しながら調査したが結果、７つの案のうち５つ、実行に移すことを断念した。第１章の①から④と⑦がそれらにあたる。断念した理由として①は、福田地区の方々は皆顔見知りで、近所付き合いも良好と判断した後、町の人たちに新しい過ごしやすい制度を提案するよりも、関係人口を増やす方法に重きを置くことが大切と考えたからである。

②は、あらかじめあるものだけで作る観光ツアーだけでは、提案する案として抽象的ではないかと考えられるため、新しい観光資源を創造する方向に変化した。

③は、提案を町の人に呼びかけたが、気軽に取り組める内容として、行動を起こすようにすると第１回目の訪問の時点で採用されたからであり、④は、シャッター街が調査により存在しないことが判明し、違った形ではあるが、肝試し企画も既に存在した事が原因となる。

⑦は、PVを作るにあたって、春夏秋冬ごとにその地域の魅力を作成するのであれば、動画に取り入れたいが、作成するにあたっての材料が収集出来ないのではという懸念により、断念した。

そして一方で、⑤と⑥は深く掘り下げる必要があると考えた。理由としては、町に観光客をよぶ上で、必要な点であること、そして、自治体が町の国際化に前向きであったという点などが挙げられる。他に、訪問時得たものとして、下調べの段階では見えてこなかった、その町特有の魅力である、困っている人に寄り添う、誰かのためにと進んで行動される現地の人々のあたたかな人柄、これらを町のトレードマークに設定すれば、この町を訪れてくれる要因になりうると考えた。

第3章　第1回目（9月10日～13日）を経て考えた案

1. 第１回目の訪問時、住民の方々に聞き取り調査を行い、主な不安や心配は下記のように挙がった。以下に不安や心配に対する解決策、提案を簡易に記す。

a） 高齢や病気を理由に重作業を伴う農業が出来なくなる

→重作業に対する若手労働人口の増加、また助け合いのコミュニティを創生する。

b） 核家族化や子供の上京、自立による老人の一人暮らしの増加に伴い、病気や孤独死など緊急の際に対する対応の遅れの心配

→より地域との繋がりを作るために行事、集会を増やす、お互いを心配しあえるコミュニティを創生する。

c） 田舎生活による毎日のルーティン作業による退屈、娯楽や楽しみの欠落

→ストレス発散法の一端として、普段とは違う人々とのコミュニケーションや地域学校の子供達とのふれあい活動により解消できるのではないか。

d） 生産者側として：農作物などの販売に対する原発風評被害

→現在では被曝に対する検査は日本一とも言えるほど厳しく、安全という事実を周知するための活動を行う、また現地での体験や食事などを通して全国に口コミを広げる。

e） 消費者側として：未だに被曝した農作物が取れる場合があるため、検査を欠かせず、今までは普通に消費していた自身の農作物の検査のためにも一度検査所に持ち込まねばならない。それが面倒になり廃棄の量が増加している。

→より近所に検査が出来る機器を設置する、また簡易の検査品を普及させることによって安心を生み、廃棄を減らす。

2. 行政側の方へのインタビューで見えた要望は以下である。

a） 関係人口の増加を図り、町の活性化をしたい。
b） 地域関係の密接化のための１つのコミュニティとしての共同農園を作りたい。
c） 特に英語教育に力を入れてグローバルに活躍できる人材を育成したい。

調査を受けて、新たなコミュニティ、繋がりの場を創出することが必要と結論付けた。

地域をより密接にし、互いの助け合いを促進するため、またグローバルな教育環境を育成する一環として、外国人観光客などもターゲットに**①ホステル事業**、**②エコな町作り案**を立案した。2つは同時進行的に行われることを想定している。

① ホステル事業

観光客をターゲットに、**関係人口の増加を目的**とした施策の一つとして立案。地域の空き農地を使った**農業体験**や**共同農園**による**日本の田舎生活をテーマにしたホステル**。

国内の近似事業との差別化の為、今日注目されている環境課題に対して、**オーガニックをテーマ**に、地元で育てた野菜や特産物を使った料理の提供、リネン素材を使った寝具、化学物質を使わないアメニティ用品を揃えるなど天然素材や自然に由来したものなどを使用する。

事業の強みと弱み

強み：

都会では味わえない、田舎の自然、非日常

川俣町特産の軍鶏、蚕などの飼育場見学、並びに体験

弱み：

駅から車で1時間程、アクセスの悪さ、アクティビティの少なさ

インターネット接続環境の未整備

対象顧客

１．欧米、EU圏など発展国かつ環境保護の意識が高まっている諸国から来る外国人観光客
２．都会に住む学生を対象に、田舎経験のない若者
３．農業やオーガニックなど、天然由来や自然産物に興味のある人

これらの条件により多く該当する層が好ましいとした。

②エコな町作り

森の案内人こと蓮沼昇さんがペットボトルの代わりに竹を水筒として使用、ペットボトルを洗浄し再度使っていると仰っていた。プラスチック袋の代わりにエコバッグやカゴを使用することに取り組みプラスチックを減らす活動をしている話を伺ったことから、何か川俣町で一つ宣伝になることとして「プラスチックゼロの町」を掲げるのはどうかという判断に至った。

第４章　第２回目（12月14日～16日）の訪問記録

ホステル事業と共同農園の２つのアイデアの実現性を確かめるために２度目の川俣町訪問を行った。

【１日目】12月14日

川俣町の広報の方々とALTの先生を務めるマーセル先生に川俣町に関することを伺った。これらの質問会より、川俣では現在町人向けの広報活動は盛んに発信されている一方で、他府県に向けた観光客を呼び込むような広報活動にはあまり力を入れていない様子。そして、第3章での提案内容にあたる、**②エコな町作り**の調査とし、環境問題への取り組みについて伺った。広報担当の方によればフードロスなどのごみの量が多い問題があり、現段階の対策としてはエシカル商品やごみの量削減の注意喚起を促すために回覧板を使用して啓発しているが、その効果は未だ見受けられない。そのため、エコな町として発信していくには、**長い時間をかけて町人のエコ意識を共通認識として浸透させる必要がある**と考える。

川俣の広報を訪問時

SDGｓ(持続可能な開発目標)を絡めた取り組みは特にないが、食品ロスの削減やエシカル消費に関する広告紙の回覧配布が実施された。一方、ごみの削減の取り組みはしていないが、分別の意識は高い。
平成27年1.2kg/1人ごみを出している。川俣では粗大ごみを無料で回収している。

質問事項

Q,マイバックの普及率として。

A.マイバックの活動として、500円でカゴの販売も行なっている。使い分けによってマイバックを使うときもある。家族単位で多くモノを買うときは複数のカゴを用いてそのカゴを車に積むといった使われ方が主流だそうだ。どっちも持っていない人はほとんどいない。

Q,SNSの広報活動はしていますか？

A,現時点ではしていないが、2019年からTwitterやインスタグラムを始める予定（仮定）・しゃものPR動画を完成させて、近いうちに発信していく。

Q,「広報かわまた」はどのように話題集めを行なっているのでしょうか？

A,有名な所に取材をする形を取っている。

Q,町民の方にはどのように情報を発信していますか？

A,回覧板・口コミ・無料のメールサービス

Q,外国人の住民は増えていますか？

A,企業に勤めている人が多いから日々増えている。（100人くらいは現時点でいる）

Q,空き家をホステル事業で使うことは可能ですか？

A,町が管理をしていなくて、個人のものなどもあるので難しい。

来年から空き家バンクで情報を外部に発信するようにする予定。

Q,定住させるための工夫はありますか？
A,川俣定住化促進総合対策事業はしている。その事業が町組合向けのもののため、民間に事業をできるかどうかはまだわからない。

Q,農泊のような取り組みは川俣でもしていますか？
A,東京の大学に募集をしに行って、２週間インターン生を募集している。インターン生はおじまふるさと交流館に宿泊する。

Q,外国人との国際交流の場はありますか？
A,あまりない。日本語教室は毎週水曜日に開催。五人ほど参加しているが、あまり参加者は多くない。

Q.「コスキン・エン・ハポン」について
A,演奏者の方に外国の方がいらっしゃいます。しかし、地元の方との交流はありません。観客は、町民だけしかいません。演奏者から町民へのコミュニケーションはあるかもしれませんが、町民が演奏者の外国人とコミュニケーションするのは見た事がありません。一方通行のような感じです。

マーセル先生との対談

ALTの先生を務めるマーセルさんからは外国人観光客を誘致する際のアイデアを手に入れる為、外国人からの視点から見た福島県川俣町のことについて伺った。

質問事項

Q,普段週末はどのように過ごされていますか？
A,スポーツジム（走っている）車で10分・フットボール・映画
フットボールは何人かでやっている（チーム）

Q,川俣の良いところは？
A,人がフレンドリー・ハイキング・しゃも

Q,川俣でALTの先生になった経緯は？
A,もともとUKの政府（外務省）で働いていたけど、面白みに欠けていてALTの募集に応募した。
自分で川俣を選んだのではなく、日本の北部の田舎を希望した。もともと故郷が田舎で、川俣に似ていた。ボランティアで子供に何かをしていた。

0, 生徒とはどのように会話するの？
A, 学校では授業中は英語で他は日本語

Q,観光客を増やすときの問題点は？
A,アクセスが悪い

日本人は東京から近いと感じるが、イギリスでは密集しているため東京から川俣の距離は遠く感じる

Q,日本の文化でお花見以外に良いと思ったところは？
A,初詣・祭り

Q,マーセルさんが取り組んでいるエコな取り組みは？
A,エコバッグ
英国では川俣町ほど積極的ではない

Q,共同農園を実際にやるとなれば、子供は参加すると思いますか？
A,参加すると思う

Q,もし外国人がたくさん来たら英語か日本語どちらを話すべきか？
A,英語よりも日本語を話すべき

Q,もしオーガニックホステルが出来たら外国人はきますか？
A,オーガニックだけでは難しい。アクティビティも少ない。農業は面白い。宿そのものは若い男の外国人は気にしないだろう。（そこに泊まって何が見られ、何ができるかが重要）

Q,レンタルサイクルはどうおもう？
A,あればぜひ使いたいけど、現時点ではそのようなサービスはない。

Q,好きな食べ物は？
A,焼肉・しゃも

Q.日本料理は作りますか？
A,男性専用クッキングクラスに参加

Q,川俣町の方は外国人が増えたら対応できると思いますか？
A,英語が話せなくても、ジェスチャーで温かくむかえてくれるから、そんなに問題ない

Q.外国のホステルオーナーを見つけられると思いますか？
A,とても簡単だろう。日本に興味がある人は多い。イギリスに環境が似ているから新しい作物が日本でできると面白い。

Q.普段日本に来る外国人は何のサイトを使っていますか？
A, Japan/guide.com←とても有名

Q,農業をするのであれば花か作物どちらがいいか？
A,食べ物のほうがいい

Q,外国人同士の交流はありますか？
A,ない。ベトナムや中国の農業を学びに来た人はいる。

Q, コスキン・エン・ハポンの時、外国人は多いですか？
　A, 参加者だけで盛り上がって、地元の方とは関わりない。また、外国人の観光客が多くはない。

【２日目】12月15日
この日は、福田行政地区に住む方々と面会し、我々の第3章で挙げた２つの案を提示し、それらに対してのフィードバックを得た。
意見としては以下のとおり。

- 外国人の交流で思いつくのは「コスキン・エン・ハポン」の時ぐらい。
- 外国人が来られても、対応(主に言語の壁)できるか不安。
- 川俣の方言は日本人でも聞き取りづらいのに、外国人は大丈夫なのか？
- 空き家は多い。しかし、水道が通っていない等開業にまで多大なお金が必要だ。水道引くのにも約２５０万円かかる。
- ホステルに人を呼ぶというのはいいと思うが、交通面はどうするのか？
- レンタサイクルはいいと思う。
- 分別は細かいと思うが、この町にも分別のルールを守らない人はいる。
- ホームステイなら、農業インターンとしてすでに受け入れている。民泊・ホステルとの違いが不明確。
- 高齢者が多い地域なので、ホームステイを受け入れる負担はかなりかかる。
- 子供が今年度46人しか生まれないほど少子化なので、小学校が統合になる予定なので、それらの小学校を使えるのでは無いだろうか？
- 月に一回食材を発売するのはどうだろうか？
- 我々は特別な料理を作り、おもてなしをすることはできる。

【３日目】12月16日

　２日目の地区の方々とのミーティング後に、町の人々が1番抵抗のない第一歩としての拠点をおじまふるさと交流館にし、ホステルにすることに方針を変えて検討した。
水道を引く費用が高い事や、高齢の方々が多く住む地域に旅行客を誘致する事は、大きな負担となり、提案しても実現可能性が低いと考えたためである。

　この日は、おじまふるさと交流館をホステルのようにできるのかを検討するため、交流館の事務所の方々にお話を伺った。

インタビューに協力してくれた方

- 尾下　峰夫さん　(川俣町教育委員会生涯学習課《社会教育施設運営補佐》・おじまふるさと交流館・羽山の森美術館)
- 落合　知良(チカラ)さん　(おじまふるさと会・会長)

<u>質問事項</u>

Q. この「おじまふるさと交流館」はどのような運営形態ですか？

A,川俣町教育委員会の下におじまふるさとの会があります。

Q.このあたりで有名なイベントはありますか？
A,長寿泉桜街道で毎年桜のシーズンに屋台を出すこと、神主さんが祈祷をするといった事が行われるお花見があります。

Q.そのお花見に行くための交通手段は？
A,おじまふるさと交流館からバスを出しています。

Q.どんな方がそのお花見に来られますか？
A,地域の人が多いです。なかなか人が集まります。
（DVD見ましたが、かなりの盛り上がり）

Q.「おじまふるさと交流館で何かしたい」と提案した場合、どうなるのでしょうか？
A,川俣町教育委員会の方で審議します。

Q.パンフレットにたくさんのアクティビティが体験できると載せていますが、実際のところどうなのでしょうか？
A,原子力発電所の影響で掲載されているアクティビティが見直しになりました。なかでも、農業体験などは田畑が使用できないため中止となりました。

Q.現在、どういったアクティビティができるのでしょうか？
A,おじまふるさと交流館のホームページに載せております。（掲載しているのは、そば打ち体験・バーベキュー・ピザ焼き体験・木工クラフト・流しソーメン・もちつき体験）

Q.アクティビティはこれだけでしょうか？
A,現在、準備途中ですが施設周辺でカブトムシの幼虫を飼育しています。それを使ったアクティビティを考えています。

Q.「おじまふるさと交流館」はどれくらいの方が使用されているのでしょうか？
A,年間約2600人になります。1番使用者が多い期間は、７・８月で、主に合宿のために使用します。あとは、宿泊なしで体育館や食堂の施設利用だけされる方もいらっしゃいます。

Q.「コスキン・エン・ハポン」に来られた方は宿泊されないのでしょうか？
A,福島駅の方まで戻り、宿泊される方が多いです。

Q.外国人が利用したことはありますか？
A,はい、あります。その時は、町の職員さんと身振り手振りでコミュニケーションを取っています。

Q.外国人が来られた時の目的や、観光されている場所はどこですか？
A,スポーツ大会に参加する為か、震災が起こった場所に訪れる為など理由は様々。昔はもっと宿泊施設はあったけど、人口減少と原発が原因で数が減ってしまった。

Q.どういった形でおじまふるさと交流館のことを宣伝していますか？
A,現在のところ、ホームページのみでの広報。
「羽山の森美術館」

「羽山の森美術館」は廃校になった小学校（旧福沢小学校）を美術館として保管する場所で、開校以来133年の役割を終えた旧福沢小学校が、町にゆかりのあるアーティストの作品を後世に残すために、里山の美術館として生まれ変わった。誰もが知っている有名な作品は展示していないが、故郷を愛したアーティストの情熱や温もりが伝わる展示品の数々あった。管理人の方々もとても親切で、訪問した際は、的確な解説をしていただいた。
おじまふるさと交流館と比べると、羽山の森美術館はほとんどリノベーションされていないため、小学校そのものが残されていた。また、こちらの美術館には昇降機が設置されており、おじまふるさと交流館よりもバリアフリーなシステムが存在する。
川俣町ゆかりのアーティスト作品も展示されていたが、川俣町の園児・小・中学生の美術作品なども数多くあり、観光客を集客したいというよりも、町の人に愛される場として親しまれている場所であった。
アクセス面では、車での移動が必要となるので、車がない観光客からすれば、気軽に行ける観光地とは言い難い。

第5章　第１章から第４章まとめ

ここまで、福島川俣町への訪問前から２回の訪問を経て思考した様々な案を出し、町民の意見や、行政の要望などを記した。
１回目の訪問時、川俣町についての特徴を事前調査し、そこからより素晴らしい町に変化させる案を持参できるよう、夏休み中何度か集まり、地域町おこしを可能とする案を大きく７つ提案した。９月中旬、これらの案の実現性を確かめながら、なおかつ、実際にその場を訪れて実感する川俣町のアピールポイントを町の人たちとの交流を通し模索した。

２回目の訪問でホステル事業に関しての反応を伺った。福田地区の方々にホステル事業に対する率直な心象、フィードバックを得ることができた。提案について、観光客の受け入れを不安視する声が挙がった。逆に私たちの提案の一部が良い評価を得た。

いままでの私たちの考えや調査を踏まえ、「サイクルツーリズム」を提案したい。サイクリング人口を福島に持ってくることができれば関係人口を増やせるのではと考えた。

1回目の訪問後、空き家を利用して、オーガニックをテーマにしたホステルを開業する案で進めていたが、ボトルネックになっていた初期投資資金の調達、確保の問題解決を模索していた。2回目の訪問時に、「おじまふるさと交流館」の民営化、または業務委託を受けて第３セクター化の案が出た。

「おじまふるさと交流館」は実地調査活動中に宿泊場所として利用していた施設で、福島県伊達郡川俣町大字小島字町畑12番地に位置し、川俣町内のおじま地区や福田地区に訪れた際に利用する町内にある数少ない宿泊施設の中の1つである。

最終案

私たちは、おじまふるさと交流館をサイクルツーリズムの拠点とする事を提案します。

日本では**自転車保有台数が世界的にみても高い**という点[1]、そして近年も**特にスポーツ用自転車が増加傾向にある点**[2]から、現在ではサイクル人口増加を喚起するサイクルツーリズムが最近各地で盛んである。

代表的な例では、福島県会津若松市のサイクリングロード、そして、広島県のしまなみ街道が挙げられる。

また、国土交通省のホームページに記載されている「GOOD　CYCLE　JAPAN」という自転車に乗ることを推進する打ちだしも行われている。

自転車を福田地区に持ってくることについてはメリットとして、

①**自転車人口を関係人口・観光人口として活かす事ができる**

②**サイクリングの視点で観光資源を見直しができる**

③**車線が広いため拡張工事が比較的不要**

という３点が挙げられる。

既存の川俣ロードレースのコースを延長させ、福田地区の景観も楽しめるコース造りを提案したい。

---

[1] 平成２７年度３月　国土交通省　『自転車交通』（http://www.mlit.go.jp/common/001259529.pdf）

[2] 警察庁「自転車施策をとりまく環境」（https://www.npa.go.jp/koutsuu/kisei/bicycle/kentoiinkai/01/01jitensha_05siryou02.pdf）

現在の川俣ロードレースのルート

私たちが提案するルート（既存ルートを北西に延伸させた）

９月訪問時、福田地区に実際のサイクリング客を発見していた。

観光客誘致には、宿泊施設が必要になる。そこで、私たちはおじまふるさと交流館を宿泊施設として活用することを提案したい。

福田地区に観光客用の宿泊施設を検討していたが、地域住民のヒアリングによると、水道工事の費用が高い事、ホームステイ式にするにしても地区住民の高齢化を考えると負担が大きいことから、福田地区に宿泊施設は不適切だと考えた。

そこで私たちは、現在宿泊施設として使われている「おじまふるさと交流館」に注目した。この交流館であれば、すでに宿泊施設としての機能は整っており、宿泊施設が独自にアクティビティを企画すれば拡張性もあると考えたからである。

この施設の以前は廃校舎であった。現在、廃校舎がこの川俣町では目立ち始めている。これは、少子高齢化によるものである。私たちはこの廃校舎においてもサイクルツーリズムにおける宿泊施設としての可能性を考えている。
廃校舎を宿泊施設として生まれ変わらせ、そして校舎ごとにテーマを変え、サイクリング以外の面でも楽しんでもらえるような施設づくりをしていきたいと考えている。それが実現すれば観光客にとって楽しめる宿泊施設になるということと、その校舎のアイデンティティを守った文化保護、再利用という観点でメリットになり得るだろう。

また、上記している第三セクターや民営化などの考えは将来的な長いスパンでの運営面の提案で、様々な企業や団体を巻き込むことが出来れば面白くなるのではないかという観点によるものだが、具体的な運営元やスケジュールなどは未定である。
あくまで「サイクルツーリズム」という政策を中心として、宿泊施設との抱き合わせによる関係人口や認知人口の増加をすることができないかを検討することが一番の目的である。
そして、次年度以降取り組みを継続させていただければ、これらの実証実験を行い、実現可能性や課題点をより明確なものにし、修正を行いながら、実際にサイクリングを楽しむ人に走ってもらい、コースの評価や感想、またイベントとして良かった点・悪かった点などを聞き込み、“川俣de「サイクルツーリズム」”の実現に向けて取り組んでいきたいと考えている。